

この第6章では、ロウイングの安全について説明します。

## 1 視覚障害とロウイングの安全

ロウイングでは、視覚障害が安全面でのハンディになります。サポートなしに一人で漕げません。しかしプラスにもなり得ます。

あのヘレンケラーもボートを楽しんでいました！ 著書「わが生涯」には、若い頃、夏にはロウイングを楽しみ、ほとんどボートの上で暮らしていた、とって良いほどだったことが記されています。もちろん一人ではなく、大体は誰かが舵をとってくれたのですが、時には舵手に休んでもらって、水草やスイレン、岸辺に生える草の香をたよりにボートを操って楽しんでいたようです。

クルー・ロウイングでは、安全はコックスが確保するので、漕ぐことに専念できます。でも、視覚障害者がクルーの安全に対し役に立たないと思うのは間違いです。視覚障害者が、聴覚を活かしていち早く危険に気づく、ということも大いにあり得ます。一人一人が持っている機能を、できる形で良いから、クルーの安全機能に組み込む意識が大切です。

誰もが完全ではありません。「足りないことはお互いに気軽に補い合おう」、「機能の多様性はむしろ安全強化につながる」という発想が大切です。

## 2 ひとりひとりの安全力とスポーツ

身の回りには事故や犯罪など危険なことが多くあります。バリアフリーといわれても、まだまだ危険がいっぱいでしょう。でも、いざというとき、精一杯、自分や、また家族や周囲の人たちを守り、また助ける力を発揮できる存在でありたいものです。そのような能力は、どのようにして身につくのでしょうか。

また、どんなスポーツでも、安全に気を配られるべき障害者スポーツでも、何かの危険、リスクがあります。特に自然の中で行うロウイングは、自然に触れ合うすばらしさとともに、自然に対峙していることによる独特の危険があります。不注意や不真面目さが直接、命にかかわり得る種類の危険だともいえます。

しかし、だからこそ、それにまじめに取り組むことで、確かな安全の能力を身につけることができます。水上を漕ぎ進むロウイングは、同時に安全能力を養うすばらしい体験となります。

## 3 自己責任

指導者やクラブには、安全を確保する責任があります。しかし同時にスポーツには「自己責任」という大原則があります。「自らの意思でスポーツにのぞみ、また危険に対するリスクは自らが負い、他者に責任を転嫁しない」ということです。

初心者ではすぐに自己責任を全うできませんが、長くスポーツを続ける過程で「自己責任が取れるスポーツ愛好者」になっていかなければなりません。